

<Profile>

さいとう・とみお

1945年兵庫県出身。関西大学卒業。96年に兵庫県の危機管理全般を統括する初代の防災監に就任。阪神・淡路大震災の教訓を生かした防災対策の充実を図るとともに、ロシアタンカー重油流出事故、新型インフルエンザなど多くの緊急事態を指揮。2001~09年まで兵庫県副知事。

BOKOMIの一環として、小中学生が中心になって活動するジュニアチームもある



途上国でも同じではないだろうか。ましてや、救援体制が十分でない途上国ほど、住民の力をどのように育てるか、つまり防災教育の普及、自分自身を守る力をどう身に付けるかが大切だ。だからこそ、私たちのノウハウを共有していければと思っています。

言うまでもなく、自然災害への対応は、一国、一地域の問題ではない。



県内で行われる日本防災実用生など、必要言語を学ぶ授業

国際社会全体で取り組むべき課題だ。その点において、私たちは被災体験を持つ地方自治体の一員として、自身が歩んできた20年を、世界に発信していく責務を担っている。しかし草の根で住民たちと協働するノウハウはあるが、海外で活動するノウハウはない。そこでパートナーとなっているのがJICAだ。20年たったが、まだ私たちがやるべきことはたくさんある。

る組織である。しかし、組織はつくるのが目的であってはならない。どのように活動を展開し、維持していくか。住民の力を最大限に引き出せる方法を考えるのは行政の仕事だ。自治会ごとに、スコープやはしご、のこぎりなどの備蓄倉庫を設置する。訓練の機会も提供する。住民たちもその中で備えを重ねていくのだ。2014年11月22日に長野県北部で起こった地震では、住民の力が大いに発揮された。倒壊した住宅に取り残された人を住民たちが協力して救助し、1人の死者も出さなかったのだ。それは、住民が自身の手で地域を守る力があるということを証明した。都市部では個人情報問題もあって難しい一面もあるが、数々の災害を経て、日本人の意識は変わりつつあるように感じる。

さらに、県内の外国人に対して、地域のNGOやボランティアなどに協力してもらい、どの地域でもすき間なく、日本語教室が開催されるよう取り組みを進めている。私どもの国際交流協会が作成した「家族を守る10のポイント!」の各国語訳で防災の知識を学び、また、日本語教室に参加することで地域の人とつながりが生まれ、協働体制が強化されることも期待している。

Voice

16

災い転じて福となす

公益財団法人兵庫県国際交流協会理事長

齋藤 富雄



阪神・淡路大震災の時に来日した海外の救助チーム。救助犬が日本の国際緊急援助隊に取り入れられるきっかけにもなった

1995年1月17日は、決して忘れられない日だ。阪神・淡路大震災が起こってから20年がたった。一言で表すと、本当に早かった。兵庫県民にとっては、「追われた20年」と言っても過言ではないだろう。淡路島北部沖を震源とした大地震は、早朝に県都の中心部を襲った。こんなに大きい地震がこの街に来るなど、私たちは思ってもみなかった。当時の意識調査では、その可能性を想定していたのは住民のわずか8%。経験したことがない規模の地震を前に、私たちはさまざまな困難にぶち当たった。発災後すぐに、海外の救助チームから支援の申し出を受けた。しかし、最初は断った。受け入れに慣れていないこともあり、さらなる混乱が起る恐れがあると考えたからだ。しかしそう発表された途端、ものすごく

い非難が各地から寄せられた。「被災地はおごっているのではないか」「今は猫の手も借りたいくらいなのに」と。そこで私たちは政府と話し合いをし、なんとか受け入れにこぎつけた。怒涛の2日間だった。海外からやってきた人々は、懸命に救助活動を行ってくれた。その姿を県民たちは、その目で見ていた。救われた命はもとより、「私たちは一人じゃない」と勇気を与えてくれた。そして、誰もが思ったのだ。「世界中どこの国の人たちにも、この悔しさ、悲しさを味わってほしくない」。そんな思いが集まり、以降、兵庫県は海外の災害にも積極的に支援を行ってきた。99年にトルコと台湾で大地震が発生した時も、仮設住宅の供与に加え、その建設を支援するスタッフなどを県から派遣した。JICAとも協働し、防災分野の行政官を

開発途上国から受け入れるなど、復興の中で国際協力が文化として根付きつつある。まさに「災い転じて福となす」である。災害の規模が大きければ大きいほど、行政の力は及ばなくなる。そうなった時に、自分の命を守るのは自分、そして地域の人々との連帯だ。神戸市内では発災後の16分間で、約60件の火災が起きた。いくら消防が優秀でも、即座に消火活動に対応できるのは10件くらいだ。自分たちの地域は自分たちで守らなければならぬ。その教訓を得た私たちは、復興のプロセスとして住民活動の組織化を入れた。もしもの備えのため、そして何かあった時に共に活動し、命を救い合うためだ。自主防災組織(自主防)、防災福祉コミュニティ(BOKOMI)などといわれ